



私事雑記帳《1》

歴史の空白～アンコール遺跡で想う～

浅井俊弥 (浅井皮膚科クリニック：横浜市保土ヶ谷区)

開院15周年を迎えた昨年2月、当院のスタッフと一緒にグアムで4日間の休暇を過ごした。皮膚科にとっては時間に余裕のある2月は、少々の臨時休診もさほど支障はないと感じ、この時期の旅行を年中行事にしようと決めた。風景を眺める旅行は多くは経験していないが、今年は、かねてから訪れてみたいと思っていたカンボジアのアンコール遺跡群を妻とふたりで訪れた。ツアーガイド同伴のバック旅行で、あわただしかったが、遺跡の素晴らしさに心が躍った。

1992年に世界文化遺産に登録されたアンコール遺跡群は、東京都区内の面積に匹敵する広さで、その中に100ヵ所に及ぶ遺跡が点在する。カンボジアの北西部に位置し、シェムリアップの町が観光拠点となるが、ここは近代的なホテルが立ち並び、世界各国からの観光客で活気に満ちていた。さて、多くの遺跡の中でもっとも有名なのがアンコール・ワットである。周囲には日本の城と同様に幅190mの堀があり、広さは東西1.5km、南北1.3kmと巨大で、中央の本殿は5基の塔と三重の回廊があり、もっとも高い塔は65mと20階建てのビルに相当する。802年に成立したアンコール王朝の寺院で、1150年頃に完成したとされるが、1400年代に隣国シャムの攻撃によって陥落した。その後お堀を含めた建物す

べてが密林に覆われ、1860年にフランス人の植物学者によって発見されるまで、400年以上もジャングルの中に眠っていたという。訪れてみて、その巨大さに圧倒されるが、これほどの大きな遺跡が、400年以上も発見されずに埋もれていたという事実に驚いた。

歴史の空白とは実に不思議である。陥落したあとには、そこに巨大な寺院があったことを知る人がいたはずである。しかし、知る人がいなくなると、歴史が途絶えてしまう。われわれも、ひとりひとりが、自分の歴史が消えることのないよう、子供達や、周囲の仲間と、今の時代を語り合い、それを伝えていく必要があると感じた旅であった。



アンコール・ワットの夕刻



アンコール・ワットの日の出



私事雑記帳《2》

小田原医師会合唱団

大林寛人（大林医院：小田原市）

皆さんの診察室には音楽が流れていますか？ 緊張している患者の気持ちを楽にするため、僕は必ず音楽が聞こえるようにしています。今日は、そんな僕が所属する「小田原医師会合唱団」のお話をいたします。

小田原には、全国でも珍しい「医師会合唱団」があります。団長は山近病院の院長、久保田光博先生（外科）。ジャズピアノの名手です。合唱団は混声で6年前に結成。現在男15名、女28名です。そのうち医師は16名でそのほかは看護師、薬剤師、看護学校関係者（小田原医師会には高等看護専門学校と准看の専門学校があり、准看は黒岩知事にいじめられ目下苦戦中！）、医師会の事務局職員などです。年齢は20～80代までと幅広く、多いのは50～60代。合唱の経験者は数人です。皮膚科医ではなんと、日下部芳志先生もメンバーの一人です。練習は月3回、

土曜の夜、山田クリニック3階のスタジオに集合します。この院長山田洋介先生（外科）の奥様が、合唱団の指導・指揮をされているのです。慈愛に満ち寛容にして音楽には厳しい聖母のような方です。練習に全員が揃うことはなかなかないけれど、オーディオマニアの先生（内科）とピアニスト（田端ゆみさん、この方も一流どころ！）が練習用のCDを作ってくださいるので、音取りの自宅学習ができてとても助かっています。

この合唱団では、何か提案したことが次々と叶ってしまう不思議な力があるようです。結成3年目にして、フランス・パリの教会でコンサート、その後京都・法然院でのコンサート、また昨年11月の第5回定期演奏会では、精神科医でザ・フォーク・クルセダーズのメンバー北山修さんを迎えての楽しいコンサートになりました。合唱団としての実力はまだまだこれからですが、でも内外からのオファーが毎年いくつかあり、本番の機会が多いのです。医師会主催の健康フェスティバルなどはもちろん、各種合唱祭への出場、金子みすゞを偲ぶ会、お寺での講話会、忘年会など……。先日は、葬儀の時に歌ってほしいと頼まれました。宗教の違いは関係なく、その日もお坊さんの前で賛美歌2曲を含めた数曲を歌いました。この春には小田原医師会の新しい会館が出来上がり、4月5日の落成祝賀会でも、できたての講堂で歌いました。10回の練習より1回のステージ！

このように、本番前の緊張と集中力を積み重ねることが上達につながっているのかなと思います。

今までの軌跡をたどってみます。

2008年3月に誕生した合唱団。3ヶ月後には小田原市民会館小ホールで結成記念コンサートを行いました。持ち歌はわずか2曲。最初に覚えたのはモーツァルトの“Ave verum corpus”でした。いつまでも心に残る1曲です。

2009年8月には第1回の定期演奏会を市民会館大ホールで行いました。歌える曲は増えたもののみ



定期演奏会ゲネプロ後全員で（提供：大塚薬報）



横浜の県立音楽堂。このホールの響きは素晴らしいです

だ足りず、第3部はチェロのコンサートになりました。その助っ人とは……、なんと世界的チェリストの藤原真理さんでした。なんとということでしょう！真理さんのチェロをバックに、最後「千の風になって」を歌ったときは涙が出そうになりました。

その後定期演奏会のステージは4部構成が定着した感じです。教会で歌うような宗教曲で「祈り」のステージ、日本歌曲のステージ、それにひとりの作詞あるいは作曲家の合唱組曲などを集めたステージ。これは第1回では新実徳英「白い歌 青い歌」、第2回：金子みすゞ集、第3回：信長貴富「思い出すために」（寺山修司の詩に信長貴富が曲をつけた作品集です）、第4回：千原英喜「あなたにあいたくて生まれてきた詩」、第5回：高田三郎「水のいのち」などを取り上げてきました。合唱の経験のある方にはなつかしいかもしれません。

もう一つのステージは、いろいろ……。

第2回では「サウンド・オブ・ミュージック」、第3回では小田和正の「クリスマスの約束」ならぬ「合唱団の約束」、第4回には「ウエスト・サイド物語」の特集をしました。ダンサーズを作り、踊りもしました。

そして昨年第5回は北山修さんとともに。この時はギター隊をつくり演奏もしました。北山修作詞の曲には、「あの素晴らしい愛をもう一度」をはじめ、「戦争を知らない子供たち」や「白い色は恋人の色」など、えっ、これも？と思うものがたくさんあります。それを合唱用に編曲した中で、信長貴富の「戦争を知らない子供たち」はまさに別物。伴奏のピアノはほとんど現代音楽のようです。しかし、観客も北山氏本人もとても感動してくれました。戦争を忌む作者の気持ちが伝わったのでしょうか。これもほとんどピアニストの腕のおかげですけど。

というわけでパレストリーナ、バッハからいきものがかりまで、さまざまな曲を歌っております。演奏会を聴いた方から、小田原医師会合唱団には優しさを感じるとほめられることがあります。それは指揮者山田浩子さんのカラーがそのまま映し出されているのです。合唱団の活動で、地域住民とのコミュニケーションがよくなり、医師会に対する親近感を感じてもらうことができればと思います。神皮の皆さんにもそのうちぜひ聴いていただきたいと思います。

さて、こうして歌曲を歌っていると、TV、ラジオなど聴いていてやはりひっかかるのです。若者の鼻濁音ができないこと。「……が」の発音が、レディー・ガガの「GA」になってしまうのです。NHKの朝ドラも「あまちゃん」以降面白く「花子とアン」も好調ですが、オープニングの絢香の歌でこれが目立つのです。思い起こせばユーミン（当時荒井由実）、彼女はぼくらの青春を飾ってくれた大きな存在でしたが、同時に「GA～」はあの人からのような気がしてならない。「卒業写真」「翳りゆく部屋」などを聞くとよくわかります。ユーミンは「GA」のイメージも強すぎ！と思うのは、僕だけでしょうか。

あと、ポップスの歌手を皆「アーティスト」と呼んでいるのにも相変わらず違和感を覚えてしまいます。「アーティスト＝芸術家」とは言わないけれど、言葉は生きていると思うけど……、AKB、ももクロも？アーティストですかい？

最後に、大げさですが僕はやはり音楽がないと生きていけないのではないかと思います。できれば死ぬまで自分で歌いたい。いままでの歌い方ではいずれ歌えなくなると思っていたら、素晴らしい先生を紹介していただきました。小田原少年少女合唱隊の指



筆者（前列左端）



北山修先生（前列右端）とアンコール「あの素晴らしい愛をもう一度」。飛び入りで白井貴子さん、横田俊一郎小田原医師会会長、加藤憲一小田原市長も

導師、桑原妙子先生です。この合唱隊は50年の歴史を持ち、海外のコンクールでも常勝の小田原の宝です。正しい発声法で90歳でも歌えるように励んでい

ます。(ボケ予防にも) 今後、できるなら、桑原先生率いる男声合唱団マルベリー・メルクワイアとも一緒に歌える日を夢見て、まだまだ修行はつづきます。

私事雑記帳 《3》

久々の親孝行？旅行

掛水夏恵 (なつ皮ふ科クリニック：茅ヶ崎市)

この度、「私の趣味」から変わった「私事雑記帳」に記事を、と言われ、旅行記でも可とのことなので、昨年GWに姪の高校留学先であるカナダを両親と訪ねた備忘録を書きます。

幼少児期の愛読書が『赤毛のアン』だった私にとって、20年ぶりに訪れるカナダに大興奮です。姪との自由時間が取れるゆったり行程の送迎付きツアーにしました。飛行機でカナダ入国後すぐに、ビクトリアまでフェリーで移動です。約1時間半島々の間を進む船旅で、景色も良く、飛行機に疲れた体を海風が癒してくれました。日本から借りていったWi-Fiを利用し、メール等で連絡が取れるため、ホテルに到着後すぐ姪と再会できました。久しぶりの和食で喜んでいる姪とカナダのロール寿司を堪能しました。翌日午前中は自由行動で、宿泊先のフェアモント・エンプレス・ホテル周辺の州議事堂や、ロイヤルBC博物館を散策後、午後はガイドさんに連れられ、リング園でリング酒の飲み比べです。姪のホストファミリーも知らないリング園。『赤毛のアン』でも出る飲み物なので、日本人観光客向けかもしれません。8種類から3種類のアップルサイダーを選んで飲む

ことができ、甘いお酒好きな私にはぴったりです。

その後有名なブッチャート・ガーデンに行きました。5つの庭園からなる広大な庭園で、様々な花が咲き乱れていました。もともとは、ブッチャート氏のセメント製造事業で残された石灰石採石場跡に夫人が手を入れたのが始まりだそうです。誕生から100年以上経った今、カナダの国家史跡に指定され、3月～10月までは花が途切れることのないように、総勢50人の庭師が手入れをしているそうです。私達だけのツアーだったので、のんびりペースでゆったりと見学ができました(写真①)。

翌日はフリータイムで、旅の目的である姪のホームステイ先、高校などを見に行きました。校舎の中には入れませんでしたが、テニスコートや、姪が主宰する生徒会活動の東日本大震災のチャリティームービーナイトのポスターを見て、ステイ先での友人に会い姪のカナダでの生活を垣間見ることが出来ました。ホストファミリーから、勤勉で聡明と姪をほめられ、叔母馬鹿にも満足しました。その後、姪の案内で石炭王のお屋敷であるクレイダーロック城を見学しました。ランチはフィッシャーマンズワー



写真①ブッチャート・ガーデン サンケンガーデン前で(両親と)



写真②エンプレス・ホテルのアフタヌーンティー 姪(左)と両親(奥)と

フで、おいしいクラムチャウダーを食べました。日本ではない33のボートハウスからなる村やかわいいアザラシも見ることが出来ました。水上タクシーで宿泊先のフェアモント・エンプレス・ホテルに戻り、有名なアフタヌーンティーです。3段に分かれたサンドイッチやケーキで、夕食が不要になるほどおなか一杯になりました(写真②)。

翌日には姪と別れてバンクーバーです。スタンレーパークやグランビルアイランドなどの観光をした後、ダウンタウンを散策しました。バンクーバーはビクトリアに比べ都会でしたが、地図を見ていると町の人が親切にすぐに声をかけてくれました。ガイドさんの話では、オリンピックを機に人々の観光客への対応が変わったそうです。観光都市との認識ができたのでしょうか？また治安が良いためかワーキングホリデー中の日本人も多く、お土産ショップなどで働いていました。

翌日は自由行動です。父の希望でリン溪谷に行こうとしたところ、繁忙期でない為OPツアーの催行なしとのことでした。ネットで調べて、シーバスとバスで簡単に行けました。父がカメラ好きで写真撮影に時間がかかり、ツアーの集合時間に遅れるのではないかといつもやきもきするので、自分達で楽しく行けて正解でした。リン溪谷は無料で楽しめる短



写真③ キャピラノ溪谷のつり橋(両親と)

めのつり橋と、ハイキングコースがあり、森の中を散策していると、カナダの神秘的な大自然に出会えた気がしました。こちらは地元の人も多く、山道なのに犬の散歩をしている人や、ジョギングしている人ともすれ違いました。

翌日は、キャピラノ溪谷とグラウスMtのOPツアーに参加です。キャピラノ溪谷は20年前と異なり、しっかりと整備されていました。メインのつり橋自体は1956年に作られ、長さ137m、谷底からの高さが70mと以前と変わっていませんでした。ゆらゆら揺らすとかなり揺れますが、少し揺らしたところで警備員から警告が入りました(写真③)。きちんと監視されています。そのほかにも以前にはなかったアドベンチャーが新設されていて、森の中で木を渡り歩く「トリップアドベンチャー」、溪谷の断崖絶壁の上に突き出した細い板の上を歩く「クリフウォーク」がありました。透明な柵から下をのぞくと溪谷に落ちそうで足がすくみ迫力満点です。

その後グラウスMtに行きました。バンクーバーは初夏なのに、山頂にはまだ雪が多く、グリズリーが冬眠からめざめて顔をのぞかせていました(写真④)。午後にはバンクーバーに戻って、散策しました。市街地では天候がよく、夕方上った展望塔(ハーバール上部のルックアウト)からは360度にわたる壮大な景色がみられました。

その夜は、両親とホテルのそばの亀井ロイヤルで、バンクーバー五輪当時に話題となった、スケートの浅田真央選手が具材を選んだお寿司、真央ロールを含む寿司を食べました。結婚後初めての両親との海外旅行に、快く送り出してくれた日本で仕事中的夫に感謝しつつ、初日と同様最終日にも、カナダの和食を食べて締めくくりました。



写真④ グラウスMtのグリズリー